Hot Information Hamamatsu Iwata Shinkin Bank

# 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume 11

特集

## 相良の名君 田沼意次とその時代

遠州偉人列伝

## 多彩なジャンルで活躍した映画音楽のユニコーン 木下忠司

ザ・サスティナブル・フューチャー

## “浜名湖バナナ”で地域に夢を、未来を

# 夢風便り

ゆめかぜだより

Volume 11

Contents

3 特集
相良の名君
田沼意次とその時代

10 遠州偉人列伝
多彩なジャンルで活躍した映画音楽のユニコーン
木下忠司

14 ザ・サスティナブル・フューチャー
“浜名湖バナナ”で地域に夢を、未来を

18 輝く未来人
浜松市出身　川嵜心蘭さん

20 われら夢風カンパニー
File : 21　株式会社ル・シアージュ
File : 22　株式会社ななほう

26 まちの映えスポット
上質な空間に浸れるスペシャルな大人の隠れ家

29 ぶらり黒猫の街さんぽ
細江町気賀周辺

32 未来に残したい遠州遺産
プリンス岬



令和6年6月発行（年2回発行）
発　　行　浜松いわた信用金庫
浜松市中央区元城町114-1
053-401-1812
https://hamamatsu-iwata.jp/
編集・制作　株式会社メディアトーク




特集

# 相良の名君

# 田沼意次とその時代

江戸時代中期の幕府で側用人（そばようにん）、老中として活躍し、遠州・相良藩主としても歴史にその名を残す田沼意次（おきつぐ）。「田沼時代」と呼ばれる一時代を築きながら、世の歴史家からは長く「賄賂政治家」のレッテルを貼られていました。しかし、その業績は現在、再評価されつつあります。今回は、令和7年（2025年）NHK大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺（つたじゅうえいがのゆめばなし）」にも登場する意次の実像を追ってみました。

相良城の御殿大書院にあったという「竹林に虎」の杉戸(般若寺蔵)

特集 相良の名君 田沼意次とその時代

# 「失われた名城」の面影を求めて

田沼意次の生誕は享保4年(1719年)。紀州藩士から旗本になった田沼意行の嫡子として、江戸に生まれました。父・意行は紀州藩時代の徳川吉宗に側近として仕え、吉宗が第8代将軍になってからは幕臣に取り立てられます。その子である意次も、吉宗の長男で第9代将軍となる家重の小姓に抜擢され、体が弱く言語障害のあった家重をかいがいしく支えました。

延享2年(1745年)、吉宗が大御所となり家重が将軍職に就いてからも、意次は引き続き家重に重用され、同時に吉宗にも仕えてその薫陶を受けます。翌年、小姓頭取に昇格したのを皮切りにとんとん拍子に出世を重ね、寛延4年(1751年)、将軍と幕府高官や諸大名との橋渡しとなる御側御用取次に昇進。これによって意次は、多くの大名や旗本との間に緊密なコネクションを築きました。「主殿頭(意次のこと)殿、この件は何とぞよしなに…」「あいわかり申した。上様にしかとお伝え申し上げまする」。

皮が刃物で切られた意次ゆかりの陣太鼓

政権のキーマンとなった意次は、宝暦8年(1758年)、40歳で大名の列に加えられ、相良1万石の地を拝領しました。そして明和4年(1767年)、相良に城を築くことを許されます。翌5年(1768年)に着工し、12年後の安永9年(1780年)に完成した相良城は、萩間川の水を大外堀に利用し、その中に本丸御殿、侍屋敷などを配した平城。東西500メートル、南北450メートルで7万坪の広さがあり、その姿はまるで竜宮城のように優美だったと伝えられています。

大澤寺本堂床下のほぞ穴を開けた木材

しかし、天明6年(1786年)に意次が失脚すると、相良城の没収と破却が決定され、同8年(1788年)には跡形もなく取り壊されてしまいました。現在、城跡には牧之原市役所相良庁舎や相良小・中・高の校舎、牧之原市史料館が建っていますが、「失われた名城」の痕跡は、周辺にいくつか残っています。それらを探して、相良のまちを歩いてみましょう。

まず訪れたのは、牧之原市大沢の般若寺。田沼家家臣の菩提寺である同寺には、相良城の御殿大書院にあったという秀麗な杉戸が保存されています。この杉戸には「竹林に虎」「牡丹に鳳凰」などの画題が細密な描線で描かれ、作者は第10代将軍家治の御用絵師、狩野典信とされています。

また、般若寺には相良城ゆかりの文化財がもう一つあります。それは、胴回り215センチ、直径55センチ、重さ28.1キロの巨大な陣太鼓。胴には田沼家の家紋「七曜紋」が描かれています。同寺の西村元隆住職によると、この陣太鼓を巡っては、次のような面白いエピソードが残っています。

丸尾月嶂の襖絵と今井一光・大澤寺住職

それは、意次が相良に在城していたある日のこと。城にほど近い遠州灘の沖に1艘の怪しげな船が現れました。どうやら海賊船のようです。家臣たちは「すわー大事！」と色めき立ち、「戦じゃ！戦の用意をせよ！」と口々に叫びました。それを聞いた意次は「待て待て。わしに良い考えがある」と冷静に言い、一人の体の大きい家臣に陣太鼓を背負わせ、「近くの山で、その太鼓を鳴らせ」と命じます。

主君の命を受けて、家臣が山上で太鼓を打つと「ドーン！ドーン！」という大きな音が四方に響き渡りました。それを聞いた海賊たちは「うわっ！大砲を撃ってきた！」と勘違いし、大慌てで退散したのです。この故事から、地元では「背負ったか相良の陣太鼓」という言葉が生まれました。

なお後年、般若寺に泥棒が入り、陣太鼓が盗まれるという事件が起こります。「太鼓がよく鳴るのは、中に金塊が入っているからだ」と言われていたためです。泥棒は盗んだ太鼓の皮を刃物で切り裂いて中を見ましたが、どうやら何も入っていなかったようでした。その後、盗まれた太鼓は寺の裏の池に捨てられているのが発見されます。「寺にとっては災難ですが、お陰で内側から田沼時代の年号と浅草の太鼓職人の銘が見つかり、間違いなく意次ゆ

相良城内で使われていた竹筒の矢来

「田沼遺産」の一つである時太鼓

平田寺本堂に設けられた田沼家専用の玄関と竹中智厚和尚

意次らの位牌を祀る開山堂兼田沼家御霊屋(特別な許可を得て撮影)

かりの陣太鼓であることが確認されました」と西村住職は話しています。

さて、続いて訪れたのは牧之原市波津の大澤寺。こちらは、解体された相良城の木材を用いて本堂が建てられました。その証拠は、本堂の床下の木材に開けられたほぞ穴。つまり、城の梁などの木材が本堂の床下に再利用されたと考えられます。同寺の今井一光住職は「床下が暗いため、先代住職の時代までほぞ穴は発見されませんでした。それが近年見つかり、1年前からは照明を付けて、より見やすくしています」と語ります。

このほか大澤寺本堂には、相良城内で旗指として使われていた竹筒の矢来(囲い)が内陣と外陣の結界として利用されています。また、本堂の梁から吊るされているのは、相良城で用いられた時太鼓。これは、相良城の破却を命じられた意次の娘婿、西尾忠移が城外に持ち出し、後に大澤寺に寄進したものです。般若寺の陣太鼓と同様、この時太鼓も貴重な「田沼遺産」と言える

堀の船着き場跡とされる「仙台河岸」の石垣(右)

でしょう。

「それ以外にも当寺には、江戸時代後期の画家で円山応挙の孫弟子という丸尾月嶂の襖絵もあります。これは意次が藩主だった時代と、意次四男の意正が相良藩主となった時代の中間期に描かれたもの。意次とは直接関係はありませんが、これも郷土の貴重な文化遺産として、ぜひ多くの人に見ていただきたいですね」(今井住職)。

相良城ゆかりのスポットは、まだほかにもあります。牧之原市大江の平田寺は、田沼家代々の御霊を祀る香華寺として有名。意次の江戸の菩提寺である勝林寺(東京都豊島区駒込)と同じ臨済宗妙心寺派の寺院であることから、平田寺も意次の篤い崇敬を受けていました。

「意次は本堂を再建させ、さらに夏冬用に豪華絢爛な袈裟2着を寄進しています。また、本堂には田沼家専用の風格ある玄関が設けられ、現在も残っています」。平田寺の竹中智厚和尚はそう語ります。

また平田寺の開山堂兼田沼家御霊屋には、意次、その父・意行、嫡子・意知らの位牌を安置。これらは原則非公開ですが、意次時代を偲ばせる重要な歴史遺産です。

このほか、相良城を思い起こさせる遺構として残っているのは、堀の船着き場跡とされる「仙台河岸」の石垣、百花稲荷という社に残る城建物の礎石、相良小学校グラウンド脇の「二の丸の松」など。かつて「竜宮城」に例えられた名城の面影は、まちのあちこちにひっそりと佇んでいます。

「相良城・城下割」の概要図(提供:牧之原市史料館)



特集 相良の名君 田沼意次とその時代

# 「タヌマノミクス」で経済と文化を活性化

田沼意次は過去の歴史書で、「賄賂まみれの悪徳政治家」「金の力で天下のご政道を曲げた、武士の風上にも置けない大悪人」として糾弾されていました。時代劇の中でも、そのような意次がたびたび登場します。しかし、「鬼平犯科帳」などで知られる小説家の池波正太郎は、これも人気作である「剣客商売」で、通説とは全く異なる意次像を描いています。

「剣客商売」の意次は、おのれの権勢をひけらかすことなく常に謙虚で、物事を広い視野で考える人物。また、たたき上げの苦労人であることから人情の機微にも通じており、誰に対しても分け隔てなく接する魅力的な性格の持ち主です。もちろん、これはあくまでもフィクションの中の話ですが、近年の研究により、実際の意次もそれに近い人物だったのではないかと、考えられるようになってきました。

そのような意次が実行した様々な政策について、主に「経済改革」「文化振興」という二つの観点から掘り下げてみましょう。まずは「経済改革」への取り組みですが、これについて触れる前に、当時の日本の経済環境を知っておく必要があります。

江戸時代の初期、幕府には家康によって600万両もの金銀が備蓄され、国内の金産出も豊富でした。しかし、長崎でのオランダ、中国貿易が盛んになるにつれ、国内の金銀は海外へと大量に流出。8代吉宗が将軍の座に就いた頃には、幕府の金蔵はほとんど底をついていたといいます。この結果、幕府は貨幣不足による財政難に陥り、この問題を解決するため貨幣を質の悪いものに改鋳する「悪貨政策」を取り入れました。これにより財政は一息つくものの、インフレの副作用を招いて経済は混乱します。反省した吉宗は「良貨政策」に転換しますが、今度は米が値下がりして農民や武士が困窮する事態となったのです。

鈴木麗華筆「相良藩主 田沼主殿頭意次」(牧之原市史料館所蔵)

その後、貨幣の流通量を増やすため再度の悪貨政策に転じ、経済は一応安定しましたが、財政難が解決したわけではありません。貨幣改鋳による財政再建はもはや限界であり、吉宗は倹約令による支出の削減と年貢の増徴(増税)による再建策に踏み切ります。この緊縮財政で年間12万7000両の黒字を計上し、100万両の貯蓄を実現しましたが、一方で民間経済は停滞し、年貢の増徴で一揆が頻発するなど、マイナス面もあらわになりました。

そんな時代に「改革者」として登場したのが意次でした。明和4年(1767年)、将軍側近の最高位である側用人となり、同9年(1772年)には幕府初の側用人兼老中となった意次は、「タヌマノミクス」ともいうべき大

田沼意次が鋳造した明和五匁銀（左）と南鐐二朱銀（中央）。右は意次が四文銭として発行した寛永通宝（いずれも牧之原市史料館所蔵）

胆な経済活性化策を打ち出します。江戸幕府の創設からすでに約170年。米を基本とする当時の農本主義経済は大きな曲がり角を迎えていました。その中で意次は、通貨改革と産業振興を軸とする「重商主義経済」によって、国富の大幅な充実を図ったのでした。

●

意次が実行した通貨改革は、従来の貨幣改鋳とは全く異なります。それは、当時、両立していた計数貨幣（1枚ごとに額面が決まっている貨幣）と秤量貨幣（重さを量って支払う貨幣）を現在と同様、計数貨幣に統一するということでした。

この頃、日本の通貨の主流は、東の江戸が計数貨幣の金貨（小判など）、西の大坂が秤量貨幣の銀貨。東西で商品を売り買いする場合、銀貨の重さを量って金貨と交換する両替商が不可欠でした。当時の公定レートは金1両＝銀60匁（1匁は3.75グラム）。このため、国内の取引なのに海外貿易のような手間がかかり、スムーズな物資の流通の妨げとなっていました。

これを解決するため、意次は二つの新たな貨幣を鋳造します。一つは明和2年（1765年）鋳造の明和五匁銀、もう一つは同9年（1772年）鋳造の南鐐二朱銀です。明和五匁銀は、12枚で小判1枚と交換できると定められました。また南鐐二朱銀は純度約98％の良質銀貨で、これ8枚で小判1枚に交換できます。意次は、この南鐐二朱銀を金貨の補助貨幣として流通させることで貨幣の統一を図り、通貨の一元化（金本位制）を図りました。

このように、計数銀貨を発行してレートを固定化し、秤量や両替の手間を省くことによって、全国的な物資の流通は大幅に活性化されました。しかし、この制度は手数料を収入源とする両替商の猛烈な反発を招きます。意次失脚後の天明8年（1788年）、明和五匁銀や南鐐二朱銀の鋳造は中止されました。それでも、「両替不要の通貨」は時代のニーズに即したものであり、12年後の寛政12年（1800年）に鋳造は再開し、一般に定着していきました。

一方、「タヌマノミクス」のもう1本の柱である産業振興で、意次が手掛けたのは国産品の活用による交易条件の改善です。当時の日本は、オランダや中国から生糸、朝鮮人参、砂糖などを輸入し、それらの代金を金銀で支払っていました。しかし、鎖国状態の日本は海外の金銀相場をくわしく知りません。それに目を付けた外国商人は盛んに貿易品を持ち込んで、日本に不利な条件で取引し、大量の金銀を持ち去ったのです。

「そんなことでは、わが日の本は貧乏になるばかりじゃ。何か別の物を交易の手段に使おう」。そう考えた意次は、まず中国との貿易に銀を用いることを止め、替わりに生産量の豊富な銅を渡すことにします。レートは銀200貫（1貫は3.75キロ）に対し銅30万斤（1斤は600グラム）に設定。しかも、代金は銅7割、俵物3割で決済することとしました。

俵物とは、アワビ、イリコ、フカヒレ、ナマコ、昆布などの乾物のこと。これらの加工海産物を俵に詰めたことによる呼称であり、中国料理の高級食材として欠かせないものです。意次は、四方を海に囲まれた日本ならではの特産品である俵物の増産を図るため、運上金（税金）を免除。また、長崎から全国に買い集め人を派遣して、各地から大量の俵物を集荷しました。

このほか意次は、上納金を収める代わりに商品の独占販売権を認める株仲間の組織化を奨励。併せて綿、たばこ、菜種、茶、桑、藍などの商品作物の生産を積極的に進め、米以外の現金による税収拡大に務めます。また、印旛沼（千葉県北部）の干拓や北海道開拓などのインフラ整備も推進。そうした積極的な経済政策は、自らの領国である相良藩でも行われました。中でも、商業や物流の拠点として意次が整備した相良港は、地元の繁栄だけでなく江戸・大坂航路の中継点として、全国的な物流の発展に貢献したのです。

意次が整備した相良港。写真は明治後期のもので、江戸期の繁栄を偲ばせる

●

それでは続いて、意次の文化政策にスポットを当ててみましょう。当時の日本は戦乱の世から遠く離れ、国学、俳句・川柳・小説などの文学、絵画など、多彩な文化が花開いた時代でした。中でも注目されるのは、オランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学問、文化、技術を研究する「蘭学」です。この蘭学の発展に大きく貢献したとされるのが、「日本のダヴィンチ、エジソン」と称される平賀源内。意次は、源内の卓越した知識や奇想天外の発想力に惚れ込み、その活動を大いに援助したとされています。

源内は讃岐高松藩（現在の香川県）の足軽身分の家の生まれ。13歳から本草学（医薬に関する学問）を学び、その後、長崎に遊学してオランダ語、西洋医学、油絵、鉱山の採掘や精錬の技術などを学びました。28歳の時に江戸に出て、本草学を研究する傍ら、湯島で日本初の博覧会を開いています。同時に発明家として、かの有名なエレキテル（静電気発生装置）の復元や、石綿を使った燃えない布、量程器（歩数計）などを開発します。さらには、戯作（大衆向けの読み物）、西洋画、焼き物などでマルチな才能を発揮。まさに江戸の大天才といえるでしょう。

平賀源内肖像（木村黙老著『戯作者考補遺』明治写、慶應義塾図書館所蔵）

意次は、そんな源内と湯島の博覧会で出会います。「源内殿。そこもとは何故このような会を開いたのか」「輸入に頼っている医薬品や、西洋の珍しい製品を日本独自の技術で国産化するためですよ。そうすりゃあ、異国に流れるばかりの金銀を逆に取り戻し、国中を豊かにできるじゃないですか」。これを聞いた意次は大いに感服し、「私もかねがね、我が国はもっと海外に目を向けるべきと考えておった。そこもとの考えには大賛成じゃ。ぜひ応援したい」と熱く語ったのです。

その後、源内は数々の業績を残しましたが、52歳の時に誤って人を殺して投獄され、獄中で病死したとされています。しかし、一説によると意次は源内の才を惜しんで、秘かに彼を牢屋から救出して相良の領内にかくまいました。源内は相良郊外の須々木原という集落に隠れ住みましたが、天明の大飢饉が起こった際、領民の窮状を見て「田沼様のご恩に報いるのは今だ」と考え、救済活動のため東奔西走したといわれています。

一介の小姓から身を起こし、幕府の中枢にまで上り詰めて旧い体制を革新した田沼意次。しかし、徳川吉宗の孫である松平定信らによって、政権の座から引きずり降ろされます。「上様（将軍家治）の権威を笠に着て、賄賂で私腹を肥やし、ご政道を私物化した」というのがその理由ですが、そもそも老中などの幕府閣僚に役職手当はなく、いわば「無給」でした。政治資金を確保するため、大名や商人からの「付け届け」を受け取る行為は意次以外の幕閣にもあったのです。結局は“名門vs.たたき上げ”の権力闘争に意次は敗れたといえるでしょう。

もちろん、意次の政治にもマイナス面はありましたが、広い視野に立った改革者としての輝きは今も色あせていません。来年の大河ドラマでは、渡辺謙さん演じる意次の姿に注目が集まりそうです。